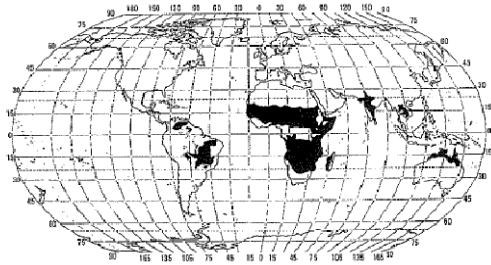


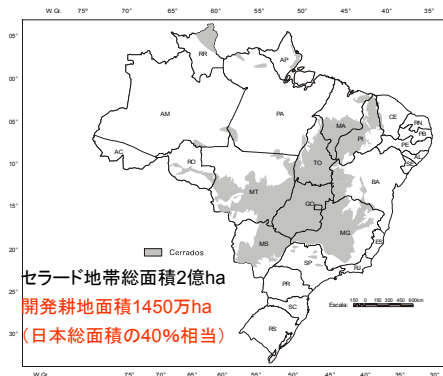
日伯セラード農業開発関連事業の実績

世界の熱帯サバンナ分布図(20億ha)



サバンナ農業開発先駆例

ブラジル・セラード地帯農業開発



ブラジル・セラード(サバンナ)地帯の原景観

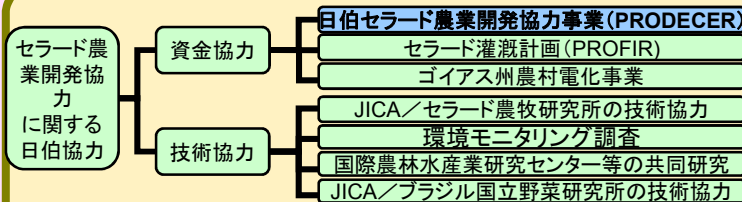
経緯・目的

- 米国の大豆輸出停止を契機に、昭和49年の田中総理とガイゼル大統領との共同声明及び昭和51年の閣議了解に基づき、日伯両国官民連携の国家プロジェクトとして実施。
- ブラジルにおける食料増産、地域開発の推進、世界の食料供給の増大と両国の経済協力関係の促進等が目的。

事業成果

- 作物栽培に不適とされていたセラード地域で①土壌改良、②適正作物の選定と育種③組合育成、④入植地造成、⑤環境保全技術、⑥民間との連携推進等を行い、熱帯サバンナ地域における農業開発の草分け的役割を果たした。
- セラード地帯の穀物増産生産量が大幅に増大
米国に並ぶ大豆輸出国へ成長
世界の食料需給の安定化に貢献
- セラード地帯の農業生産拡大・多様化により、アグリビジネス(穀物以外にも青果物、畜産、燃料作物など)が進展。
- ブラジルの地域開発及び環境保全にも大きな貢献。

セラード農業開発に関する日伯協力



PRODECER事業概要

セラード地域の農業開発(入植者717戸が、農地造成、灌漑整備等を実施し34.5万ha(東京都面積の1.6倍)を開拓)に対して、融資を実施。

- (JICA開発投融資、OECF(現JICA)海外投融資、民間銀行)
- ①総事業費: 約684億円(うちODA279億円)
 - ②事業期間: 1979年~2001年
(第1期事業~第3期事業)

【出典: 日伯セラード農業開発協力事業合同評価調査総合報告書他】



広大な大豆畑



野菜生産地帯に変貌

日伯モザンビーク三角協力による農業開発プログラム

現状と課題

モザンビーク全農家の96%が小規模家族農家であり、低投入・低生産性の自給自足型農業を経営。ナカラ回廊地域は、一定の雨量と広大な農耕可能地に恵まれているものの、その多くは未開墾地。農業技術は伝統的なものに限定され、自給作物・商業作物ともに低い生産性が問題。同地域では大規模栽植企業の参入が見られるが、土地利用区分の設定など、小規模農家に配慮した開発計画が必要。

ナカラ回廊地域農業開発

農業生産拡大のポテンシャルが高いものの、開発が進んでいなかったナカラ回廊地域の農業開発をすすめることで、地域の小農の貧困削減、食糧安全保障に貢献しつつ、経済成長に貢献する農業の展開可能性も見込む。

各協力のスケジュール



日伯モ三角協力の意義



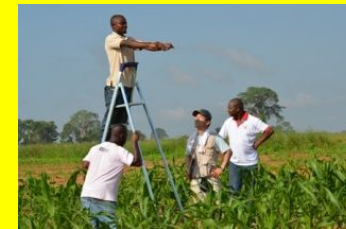
- 【食糧安全保障への貢献】
- 【「責任ある農業投資」モデルの構築】
- 【日伯の20年に及ぶセラード農業開発協力経験の活用】
- 【三角協力のモデル構築を通じた国際社会での認知・評価の向上】
- 【日本・モザンビーク2国間関係の発展】
- 【日本・ブラジル2国間関係の発展】

現行案件進捗状況

- 1. ナカラ回廊農業開発研究・技術移転能力向上プロジェクト**
ねらい: ナカラ回廊地域の今後の農業開発に活用するために、適正な作物・品種、栽培技術の開発を行うとともに研究開発体制を整備する。
協力期間: 2011年5月～2016年4月
- 2. ナカラ回廊農業開発マスタープラン策定支援**
ねらい: 持続的農業生産システムを推進する民間投資や貧困削減を通じた、ナカラ回廊地域の社会経済開発に資する農業開発マスタープランを作成
協力期間: 2012年3月～2013年9月
- 3. 農業技術普及/実証調査支援(仮称)**
上記2案件の成果を活かし、ナカラ回廊地域への適正農業技術の普及を目指す。



日伯モ専門家による研究計画検討



ナンプラにおける試験圃場での活動